当科で経験した放線菌症の４例

達 富 真 司　　浦 本 直 紀

富山県立中央病院　耳鼻咽喉科

放線菌症は口腔内常在菌の一種である放線菌が原因となり起こる特異性炎症疾患であるが，抗菌薬が普及した今日ではまれな疾患である．当科では最近，頭頸部領域に発生した４例の放線菌症を経験したので報告する．症例１は 69 歳の女性で関節リウマチに対し，ステロイドとメトトレキセートを内服中であった．数か月持続する左頬部腫瘤で当科を紹介された．頬粘膜下の良性腫瘍と考え摘出術を計画したが，術前に頬部皮膚の発赤と自潰，膿性の浸出液を認めた．悪性腫瘍の可能性も考えられたが，摘出した腫瘤の病理検査で放線菌症と診断された．術後の精査で左下顎第６歯根尖部病巣が原因と診断された．症例２は基礎疾患のない 68 歳の男性で，数日前から舌痛があり当科を紹介された．舌左側縁に硬結を認め，悪性腫瘍が疑われ生検を施行したところ，放線菌症と診断された．症例３は 63 歳男性で，数週間持続する左耳下部腫脹で当科を紹介された．耳下部全体が腫脹し皮膚は軽度発赤していた．また血液検査で糖尿病が発見された．耳下腺炎と考え経口抗菌薬を投与したが耳下部腫脹は改善せず，膿瘍を形成したため切開したところ，黄色の顆粒を含む膿汁が排出された．病理検査により放線菌症と診断された．症例４は 46 歳女性で，１週間前から右耳下部が腫脹し当科を紹介された．耳下部に腫瘤を触知したため耳下腺腫瘍を疑い，MRI を予定した．しかし徐々に耳下部皮膚が発赤し，MRI でも腫瘍ではなく炎症と考えられた．経口抗菌薬を投与したが改善せず，膿瘍を形成したため切開したところ，黄色の顆粒を含む膿汁が排出された．病理検査により放線菌症と診断された．特に基礎疾患は認めなかった．これら４症例について，若干の文献的考察を加えて報告する．